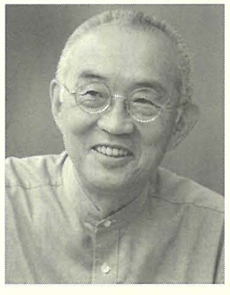
100年先を読む―⑲

襲来する情報洪水を制御する知恵

東京大学名誉教授
月尾嘉男



想像を超越する情報洪水

最近の情報社会にエクサフラッドという新語が登場した。エクサは一個の数字に一八のゼロが連続している桁数を表示する接辞で、フラッドは洪水であるから、桁外れの情報洪水という意味になる。アメリカの調査会社の発表によると、今年、世界に氾濫するデジタル情報は約九八八エクサバイトになるということである。デジタル情報以外の情報も存在するが、それらは通信ネットワークで広範に流通しがたいので除外されている。

この洪水の規模を理解するため、いくつかの比較をしてみる。今年一年に発生する情報は、これまで人類が書籍として蓄積してきた情報の約三〇〇万倍、逆算すれば、今年の一〇秒間に発生する情報が過去の人類の英知の蓄積に相当する。それだけの情報を人間の頭脳に蓄積しようとすれば、五〇〇〇万人の頭脳を必要とする。いずれも唖然とする数字であるが、問題は洪水に対処しなければならないということである。

中心から外れることが戦略

デジタル情報の相当部分はサーバーに蓄積されているので、様々な検索サービスで発見することは可能であるが、洪水の奔流から自分が必要とする一滴の情報を発見するのは至難の仕事である。そこで、第一の方法が距離フィルターの利用である。関西の地方都市に本社のある企業の創業社長は、特別の用件がなければ東京へは出張しないとのことである。無用の情報が氾濫しており、混乱するだけというのが理由である。

関西で生活していれば、東京との数百キロメートルという距離により、それほど重要ではない情報は途中で消滅するという理屈である。実際、IBMはアーモンク、マイクロソフトはレドモンドなど、一般には無名の地方都市に本社のある世界企業は多数存在する。日本でも地方都市の企業が狂乱経済に左右されず堅実に発展してきた事例は多数ある。岡目八目という言葉が示唆するように、中心の外側に位置することは意外に重要である。

鈍感は情報に翻弄されない能力

距離フィルターが有用であるとすれば、時間フィルターの利用も期待できる。制御理論にハンチングという現象がある。外部からの情報に過敏に反応して制御すると、結果が目標から乖離してしまうオーバーシュートといわれる状態になる。そこで慌てて反対の情報を入力すると、今度は反対の方向にオーバーシュートし、結局、右往左往して目標に到達できない結果になるという現象である。

この防止のためには一定時間の平均の数値を入力することである。人間社会に対応させれば適度に鈍感になることである。アイスランドは二〇〇六年ごろまでは世界有数の成功した国家であったが、銀行がサブプライムローンなどに過敏に反応して投資をしたため、銀行どころか国家の破綻にまで拡大した。その反省から男性本位の勇猛果敢な社会から、女性主役の安定志向の社会への転換が検討されている。鈍感も重要なのである。

様々なフィルターで洪水を制御

ヘンリー・フォード一世に有名な逸話がある。成功してからの記者会見で、あなたのような学歴の人間が何故成功したのかという失礼な質問があった。フォードは悠然と、自分は周囲に何人も著名な学者を雇用し、それらの学者に質問すれば、自分で判断するより適確な知識がいつでも入手できると回答した。人間フィルターは誰にでも利用できることではないが、情報を取捨選択する方法として参考になる逸話である。

五〇〇〇万人に相当する頭脳を一人で保有することはできないが、文殊の知恵のように、自分の頭脳の何倍かの能力を身近に活用できれば、それらの人々の過去の蓄積も利用でき、大変な威力になる。フィルターを通過させるというと、社会を偏見で観察するように誤解されるが、想像もできない情報洪水に翻弄されないために、フィルターは必須である。様々なフィルターを駆使し、洪水を自在に制御する能力が期待される時代である。